

幼児期における運動遊びの援助・指導に関する研究

守

渉¹

現代社会は生活全般が便利になり、生活が豊かになる一方で、体を動かす機会が減少し、幼児期に身に付けておくことが望ましい多様な動きの獲得や体力、運動能力に影響を与えていると考えられる。保育現場でも幼児期の運動遊びの重要性を認識しているが、実際に行っている運動遊びの内容や方法には明確な基準がないため、幼児期の運動遊びに関する援助や指導は、保育者の考え方に依存している状況にある。

本研究では、運動遊びについて、保育士が子どもの姿から感じる特徴や具体的な運動遊びの場面における援助・指導の課題として感じている事項などについて、運動遊びの実態を把握することを目的にWEBアンケートを実施した。保育士が日頃、運動遊びに取り組む子どもの姿から感じている視点を整理するとともに、保育士が援助・指導をする上でどのようなことを課題ととらえているのか傾向を明らかにした。自由記述の内容に関しては、計量テキスト分析KHCoderを使用し分析を行った。その結果、保育士は幼児の運動遊びの経験（生活経験）不足や体の操作が未熟であることを課題としてとらえている傾向があり、また、運動遊びを援助・指導する上では、一人一人の個人差や発達段階に応じた援助・指導方法や年齢・発達の特性に応じた運動遊びの内容について課題と感じていることが明らかになった。

Keywords：幼児期、運動遊び、保育園、保育者の援助・指導、保育内容の指導法（健康）

I はじめに

文部科学省の調査では幼児期に体を動かす機会が減少し、身に付けておくことが望ましい多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響を与えていると指摘されている。子どもの体力の向上に関しては、長年にわたり日本の教育課題となっている。

文部科学省が実施している「体力・運動能力調査」の結果によれば、児童の体力・運動能力は、概ね低下傾向に歯止めがかかっているものの、体力水準が高かった昭和60年頃と比較すると、基礎的な運動能力は依然として低い状況にある¹⁾。それに関連して、日本学術会議が「4歳から6歳の幼児の運動能力は低下傾向にある」²⁾と指摘しており、幼児期からすでに始まっていると考えられる。

全国体力・運動能力、運動習慣等調査が小中学生を対象としていることもあり、子どもの体力向

上の方策の多くは、就学後の取り組みが中心となっている。しかし、運動の習慣化やポジティブな運動嗜好の形成、様々な運動機能の発育発達を考えると、幼児期の運動経験や運動量確保は小中学校期と同様、あるいはそれ以上に重要である³⁾と言える。

地域や家庭において、安全に過ごしながら安心して充実した運動遊びを行う空間的、物的、人的にも良好な環境を整備することは、ますます困難な状況になることが予想される。そのため就学前のほとんどの子どもが利用する保育園、認定こども園等の保育施設の役割は今後ますます大きくなると考えられる。そこで関わる保育者は、一人一人の子どもの発達段階を考慮し、興味や関心に応じた主体的な運動遊びを引き出す環境を整え、充実した運動遊びが発展していくための援助を行っていくことになる。大木は、ここでの保育者の運動遊びの捉え方、関わり方が活動の内容や展開、活動の充実度に大きく影響していくことにつな

1. 宮城学院女子大学教育学部教育学科

る⁴⁾と指摘している。このことから常に、保育施設が個々の子どもの成長・発達に適した運動の支援や指導が行われているか点検していく必要があると考える。

II 目的

幼児期においては、子どもが遊びを通して育む健康が重要である。子どもたちは、諸感覚を働かせながら自ら環境と関わり、直接的な体験を通して様々な動きを獲得していくことになる。運動遊びを中心とした活動の中で、身体を十分に動かしながら多様な動きを身につけることが期待される時期である。健康な体づくりという大きな目的とも関連があり、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくり⁵⁾につながると言われている。保育所保育指針や幼稚園指導要領では、子どもを能動的かつ主体的な存在ととらえている。子どもの主体的な活動と環境との間には強いかわりがあるのと同時に、幼児期の発達にふさわしい多様な動きや運動遊びに視野を広げて考えること⁶⁾は意義深いことである。

保育現場でも、幼児期の運動遊びの重要性は認識されているが、実際に行っている運動遊びの内容や方法には明確な基準がないため、幼児期の運動遊びに関する援助・指導は、保育士や幼稚園教諭の考え方に依存している状況にある。

また、そのような状況の中、運動遊びを技術指導の側面から捉えることで、具体的な運動技術が必要と考えてしまい、保育者の中には苦手意識を持ち、保育者自身も運動遊びの経験が少ない場合もある。杉江は、保育者が技能獲得を伴った運動場面での指導に難しさを感じていることを明らかにしている⁷⁾。

そこで本研究では、運動遊びについて、保育士が子どもの姿から感じる特徴や具体的な運動遊びの場面における援助・指導の課題として感じている事項などについて、運動遊びの実態を把握することを目的にWEBアンケートを実施した。保育士が日頃、運動遊びに取り組む子どもの姿から感

じている視点を整理するとともに、保育士が援助・指導をする上でどのようなことを課題ととらえているのか傾向を明らかにする。

III 研究方法

1 研究の方法と手続き

調査協力園の園長に依頼し、保育士にアンケートの概要を示した用紙と研究同意書を配布してもらった。概要を示した用紙にQRコードを記載し、Google フォームによるWEBアンケートで実施した。なお、本調査にあたり、宮城学院女子大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：第2023-11号）。

2 調査対象

自然豊かで身体を十分に動かすことができる宮城県内の調査協力園（6園）に依頼した。十分な広さを確保し、運動会などの行事ができる園庭、お遊戯会などの様々な行事や活動にも利用される遊戯室（ホール）、各年次のクラスごとの保育室がある保育施設を対象とした。園長や副園長などの管理職をはじめとするすべての保育士を調査対象とした。

3 調査期間

2023年9月下旬に調査協力園にアンケート調査用紙を配布し、2023年12月までWEBでアンケートを実施した。

4 アンケート項目・調査内容

アンケート項目は、①性別、②年齢、③通算の保育経験年数、④勤務先、⑤役職、⑥担当クラス、⑦保育者自身が幼児と一緒に体を動かして遊んでいる頻度、⑧運動遊びで保育士が幼児の課題として感じること、⑨運動遊びを援助・指導する上で保育士が課題として感じることにについて回答を求めた。⑧、⑨の項目に関しては、大木らの先行研究⁸⁾を参考に、7～8項目を設定し、内容を構成した。筆者は、運動遊びの実態把握のため、保育施設における運動遊びの取り組みに関する調査

(2023)を行ってきた。本稿はその調査結果の一部に再検討を加えたものである。

5 分析の方法

運動遊びで保育士が幼児の課題として感じるごとと、運動遊びを援助・指導する上での課題として感じることに限っては、回答した理由を自由記述で内容を質問した。なお、自由記述は計量テキスト分析KHCoderを使用し分析した。逐語録に出現する語を計量的手法により抽出・整理し、抽出された語（以下、抽出語）についてその出現傾向を検討するため共起ネットワーク分析を行った。本研究では共起ネットワークの作成にあたり、共起関係の強さを示すJaccard係数が0.25以上のものを表示するように設定した。抽出語の共起関係を探り、自由記述の文脈を検討した。

6 倫理的配慮

調査協力園の保育士に対しては、研究の趣旨と倫理的配慮等について文章及び口頭で説明した。回答の強制は行わず、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。また、アンケートは無記名とし、収集したデータについては個人を特定できない形で分析を行った。

IV 結果

回答者の保育士51名のうち、性別は男性3.9%（2名）、女性96.1%（49名）だった。また、回答者の年齢は、55歳以上が最も多く25.5%（13名）、次いで30～34歳が19.6%（10名）、40～44歳が15.7%（8名）、45～49歳が15.7%（8名）、35～39歳が9.8%（5名）、20～24歳が5.9%（3名）、25～29歳が3.9%（2名）、50～54歳が3.9%（2名）となり、幅広い年齢層の保育士から回答が得られた（表1）。

通算の保育経験年数は、多い順に11年～20年が31.4%（16名）、5年～10年が21.6%（11名）、21年～30年が19.6%（10人）、30年以上が15.7%（8人）、5年未満が11.8%（6人）から回答が得られた（表2）。

表1 性別と年齢

	人	%
性別	男性	2 3.9
	女性	49 96.1
年齢	20～24歳	3 5.9
	25～29歳	2 3.9
	30～34歳	10 19.6
	35～39歳	5 9.8
	40～44歳	8 15.7
	45～49歳	8 15.7
	50～54歳	2 3.9
	55歳以上	13 25.5

表2 通算の保育経験年数（産休・育休期間は除く）

	人	%
5年未満	6	11.8
5～10年	11	21.6
11～20年	16	31.4
21～30年	10	19.6
30年以上	8	15.7

勤務先は、私立保育園・認定こども園が58.8%（30名）と最も多く、次いで公立保育所が、39.2%（20名）、認証保育所が2.0%（1名）であった。

また、役職は、園長が2.0%（1名）、主任（副主任）が5.9%（3名）、主任保育士が3.9%（2名）、学年主任（乳児、幼児リーダー）が9.8%（5名）、クラス担任が58.8%（30名）、フリー保育士等が19.6%（10名）であった（表3）。

表3 勤務先と役職

	人	%
勤務先	公立	20 39.2
	私立	30 58.8
	認証保育所	1 2.0
役職	園長	1 2.0
	主任（副主任）	3 5.9
	主任保育士	2 3.9
	学年主任（乳児、幼児リーダー）	5 9.8
	クラス担任	30 58.8
	フリー保育士等	10 19.6

クラス担任と回答した保育士の担当クラスは、2歳児が36.7%（11名）が最も多く、1歳児が16.7%（5名）、3歳児が13.3%（4名）、0歳児が13.3%（4名）、4歳児が10.0%（3名）、5歳児が10.0%（3名）であった（表4）。

保育士自身が幼児と一緒に体を動かす頻度についての項目（表5）では、「ほぼ毎日遊んでいる」が52.9%（27名）、「毎日遊んでいる」が35.3%（18

表4 担当クラス

	人	%
0歳	4	13.3
1歳	5	16.7
2歳	11	36.7
3歳	4	13.3
4歳	3	10.0
5歳	3	10.0

表5 保育士が幼児と一緒に体を動かして遊ぶ頻度

	人	%
毎日遊んでいる	18	35.3
ほぼ毎日遊んでいる	27	52.9
週に1回程度遊んでいる	3	5.9
あまり遊んでいない	3	5.9
遊ばない	0	0.0

名)と回答しており、保育施設の活動の中で、幼児と一緒に体を動かして遊んでいる保育士が多い結果となった。

運動遊びで保育士が幼児の課題として感じること(図1)については、「運動遊びの経験(生活経験)不足(58.8%)」が最も多く、次に「体の操作が未熟な子どもが多い(51.0%)」という回答であった。運動遊びに対する意識に関わる項目の「体を動かすことを好まない子どもや苦手意識を持った子どもが多い(33.3%)」や体力や運動能力に関する項目の「運動能力の低い子どもが多い(33.3%)」、「体力の低い子どもが多い(31.4%)」がほぼ同数であった。次いで、「体を動かして遊ぶ時間が少ない(29.4%)」という回答であった。

運動遊びを援助・指導する上で保育士が課題と感じていること(図2)では、「一人一人の個人差、発達に応じた援助方法(62.7%)」が最も多く、次いで「年齢・発達の特性に応じた運動遊びの内容(56.9%)」という回答であった。個人差や発達段階を考慮した援助・指導に関する項目が高い割合を示す結果となった。次に「子どもの意欲を引き出し、楽しむための方法(54.9%)」、「体を動かしたくなる環境構成や工夫の仕方(47.1%)」、「運動意識に対する苦手意識を持った子どもへの対応、教え方(37.3%)」、「保育活動への具体的な取り入れ方(27.5%)」の順となり、実際の運動遊びを展開する方法に関する回答であった。

V 考察

1 運動遊びで保育士が幼児の課題として感じること

保育士は、子どもの運動遊びの経験(生活経験)不足や体の操作が未熟であることを課題として捉えている。運動遊びの経験(生活経験)不足について共起ネットワーク(図3)では、「経験」から「不足」「出来る」「縄跳び」「ボール」との関係が示されていた。体の操作が未熟であることに限っては「遊び」「体」「多い」「ごち(ない)」「動き」「時間」などの出現語が中心となっていた。さらに「転ぶ」「手」という語も体の操作に関連していると考えられる。共起している語の具体的な内容としては「経験不足から学年に応じたボール投げや縄跳び等ができない」や「ごちない体の動きが多く、動きに慣れるまで時間がかかる」、「転んだ時に手をつかない」という記述が見られていた。以前なら日常生活や毎日の遊びの中で身に付けてきた動きが、安全面重視の考えなどにより十分に獲得できず、からだの動きの能力の未発達、感覚の鈍化といった影響が幼児期の育ちの不安へとつながっていると考えられる。

筆者が行ったごちない動きをする幼児の調査(2022年)では、体の操作に関することで、転んだ時に手が出ずに顔面に怪我をするケースや動きがごちないと感じる場面が多いと回答するケースがあった⁹⁾。運動遊び中にバランスを崩したり、自分の体を支えられなかったりするといった体の使い方がスムーズではない子どもが目立つようになっていると言える。

これまでも、運動遊びの経験(生活経験)不足からうまく体をコントロールすることができない現状が指摘されている。子どもは、様々な動きを経験しながら、自分の体を上手に操作できるようになることから、経験不足と体の操作は強く関連していると言える。身体の動きや身体を使った遊び場面における子どものごちない動きなどについて、川島らは、低い運動パフォーマンス自体を一次的影響と言い、そしてそのことによる運動への消極的参加や自己並びに他者評価の低さを二次

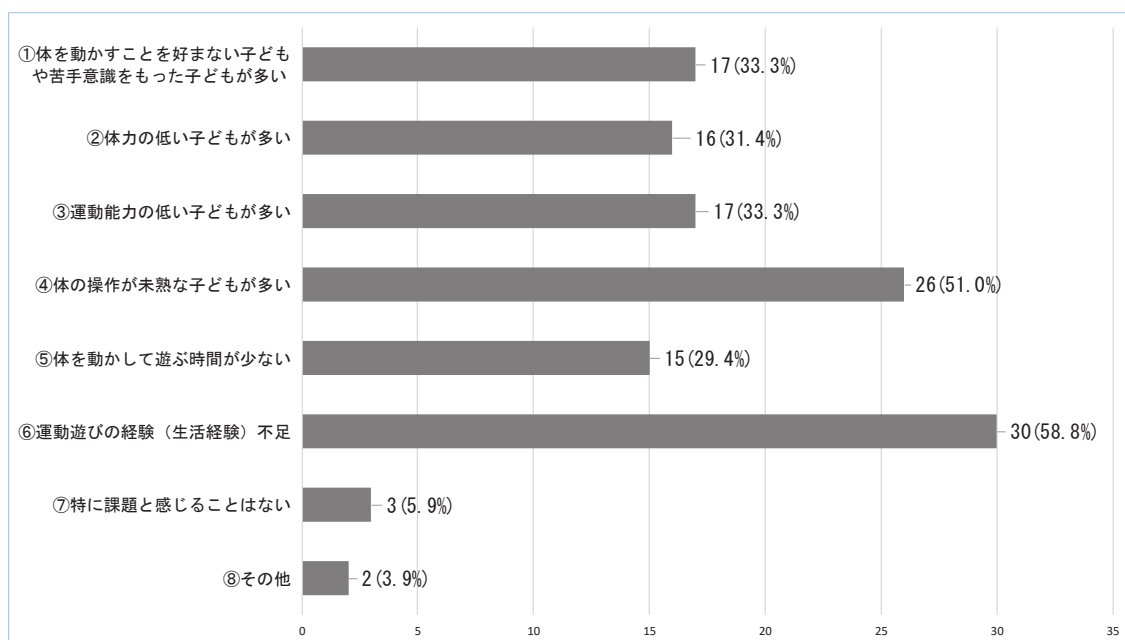


図1 運動遊びで保育士が幼児の課題として感じる事

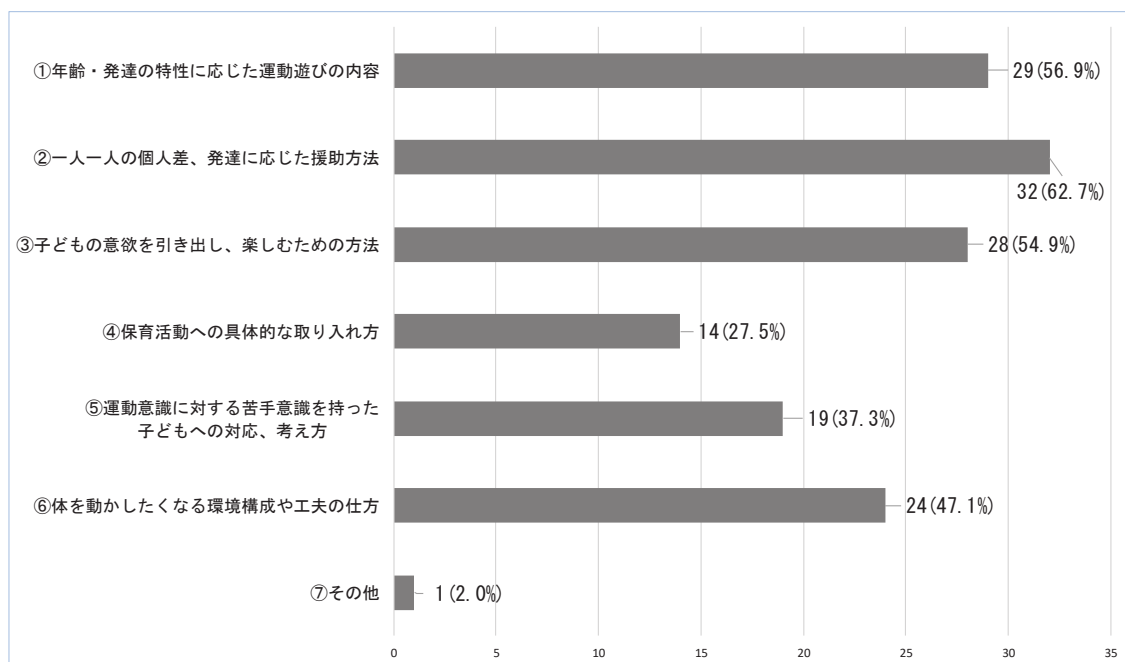


図2 運動遊びを援助・指導する上で保育士が課題と感じる事

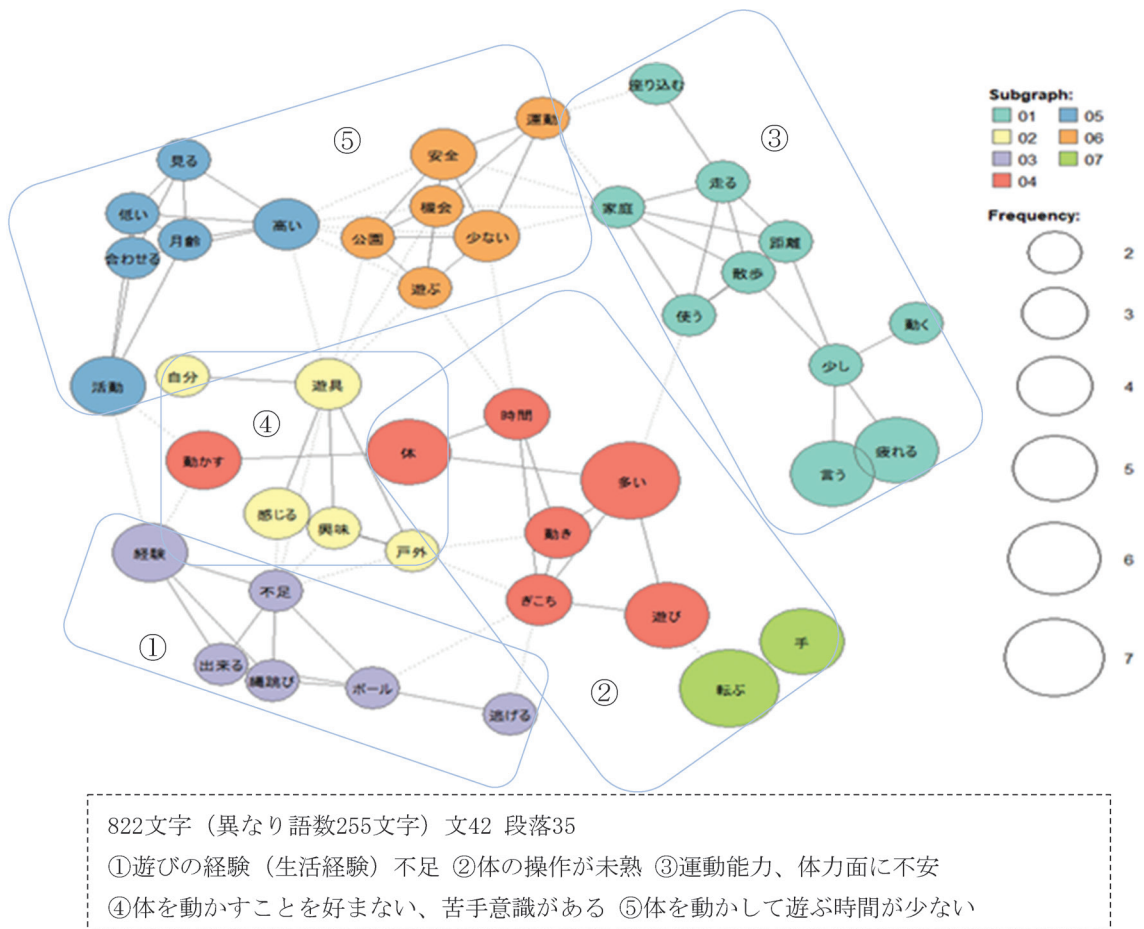


図3 運動遊びで保育士が幼児の課題として感じることについての自由記述の共起ネットワーク

的影響¹⁰⁾としている。思いきり遊びたいと思うがそれができず、失敗経験を重ねて自尊感情を下げてしまうとともに、対人関係形成や集団参加に影響を及ぼし、周囲の人々のその子どもに対する評価に影響を与えてしまう。就学前の問題と捉えるのではなく、就学後の学習への影響も考えられる。ぎこちない動きは適切な支援のもと運動に参加することで解決されることも可能となるため、運動遊びへの参加の機会を増やし、具体的な遊びの支援の創造・構築が必要である。

また、子どもの運動能力や体力面に不安を感じている保育士も多い結果となった。共起ネットワークでは、「疲れる」「言う」が頻出しており、「走る」「座り込む」「散歩」「距離」「家庭」「使う」

の関係が示されていた。共起している語の具体的な内容としては「距離のある散歩ですぐ疲れたと言う」や、「走るとすぐに座り込む」などの記述が見られ、体力面への不安が指摘されている。それぞれの発達段階で経験しながら身に付けていくバランス感覚やリズム感、基礎的な体力等、様々な能力が幼児期に十分に身につけていない現状がある。乳児から幼児期にかけては、身体機能全般の発達が著しい時期である。特に身のこなしや器用さにつながる神経系の発達が著しい。この神経系の発達のピークは5、6歳で、普段の生活で必要となる動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結びつく動きなど多様な動きが身に付けやすくなる。神経系の発達が著し

い幼児期に運動遊びを通して多様な動きを身に付けることは、運動を調整する能力も高まり自分の体をコントロールすることができ、健康な生活を送る基盤づくりにもつながると考えられる。

そして、体を動かすことを好まず苦手意識を持った子どもや、体を動かして遊んでいる時間が少ない子どもも一定数存在していることが示された。体を動かすことを好まない苦手意識がある子どもについて共起ネットワークでは、「遊具」「興味」「戸外」「感じる」の関係が示され、共起している語の具体的な内容としては「外の遊具に興味を示さない」「戸外よりも室内を好む子が多いと感じる」等の記述があった。体を動かして遊ぶ時間が少ないことについては「安全」「機会」「公園」「遊ぶ」「少ない」といった語の関係や、「活動」「月齢」「高い」「低い」「見る」「合わせる」の関係が示された。共起している語の具体的な内容には「安全面を優先するあまり、保育所でも家庭でも運動の機会が少ない」「近所の公園で遊ぶことが少なくなった」「活動を月齢の高い子に合わせると低い子は見ていだけになる」という記述があった。運動遊びよりも静的な遊びを好む子どもが多く、友達同士で活動しようとせずに無関心な姿勢でいることが問題視されている。苦手意識があると座って見ていだけの時間が多くなり、その結果、運動遊びの時間が少なくなっていると考えられる。絶対的に体を動かして遊ぶ時間が少ない子どもに対しては、保育施設での過ごし方に着目するだけではなく、保護者と連携を図り、公園等でもっと気軽に運動遊びを楽しめる機会を増やす方策を考えていく必要がある。

2 運動遊びを援助・指導する上で保育士が課題と感ずること

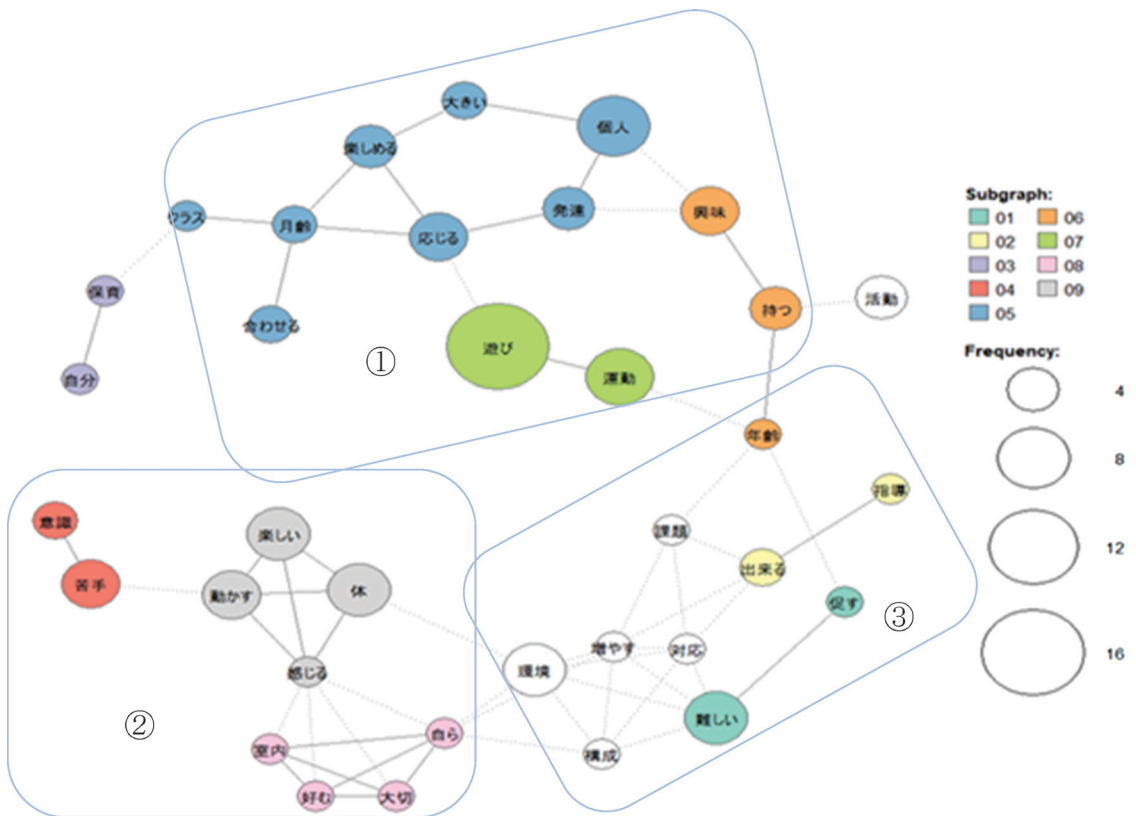
保育士は、一人一人の個人差や発達段階に応じた援助方法や年齢・発達の特性に応じた運動遊びの内容に課題を感じていた。共起ネットワーク(図4)では、「遊び」「運動」「個人」「発達」「応じる」「月齢」「楽しめる」といった語が出現していた。共起している語の具体的な内容としては「個人差

があり促し方が難しい」や「クラスによっては月齢の幅が広い場合があり、それぞれの発達に応じた遊びの提供が難しい」などの記述があった。保育施設で行う運動遊びの内容や方法には明確な基準がないため、幼児期の運動遊びに関する指導は、保育士の考え方に依存している状況にある。同じクラスでも個々の身体機能や運動能力に差が見られ、その結果、運動遊びの内容そのものに違いが出てくると考えられ、個人差への対応に苦慮している様子がうかがえる。

幼児期に遊びを通して体を動かすことの重要性は広く認知されているが、三井は、運動遊びの指導法に関しては、「体系的な遊びの指導のあり方」を基軸にした方法となっておらず、「科学が未開拓」な分野になっている¹¹⁾と指摘している。このことは、運動遊びの援助や指導方法を考える際に、個別の運動を構成している技術的特性を解明し、その技術的特性を動き全体の中で捉え直し、遊びの指導論と関わらせながら、遊びという活動にふさわしいものに構築していく取り組みが求められている。

また、運動遊びに対する意欲や運動遊びの楽しさに関する事項も高い割合を示していた。共起ネットワークでは、「楽しい」「動かす」「体」「感じる」の関係が示された。さらに「苦手」「意識」などの語も抽出されており、運動に対する苦手意識を持った子どもへの対応や、教え方に関連していると考えられる。共起している語の具体的な内容としては「体を動かすことが楽しいと実感してほしい」、「苦手意識のある子どもに対してどのようにアプローチすればよいか悩む」といった記述が見られた。苦手意識を持ち、運動遊びに意欲的に取り組むことができない子どもに対し、保育士は幼児が自分の好きな、また自分ができる運動遊びを楽しむことができる環境を整え、個々の幼児に応じた援助をしながら、幼児ができた体験を積み重ねて苦手意識を少なくしていくような運動遊びの内容や活動のプロセス等への工夫¹²⁾がより一層求められる。

次に、体を動かしたくなる環境構成や工夫の仕



695 文字 (異なり語数 225 文字) 文 41 段落 38

①個人差や発達段階に応じた援助方法、年齢・発達の特性に応じた運動遊びの内容

②運動遊びに対する意欲、運動遊びの楽しさ ③体を動かしたくなる環境構成や工夫の仕方

図4 運動遊びを援助・指導する上で保育士が課題と覚えることについての自由記述の共起ネットワーク

方も比較的高い割合を示していた。共起ネットワークでは、「環境」「難しい」「促す」等の関係が示された。共起している語の具体的な内容としては「出来たを増やす環境作りが難しい」といった記述が見られていた。杉原らは、多様な動きの体験は子どもの発意としての活動である遊びのなかで保障されるものであり、保育において、子どもが体を動かしたくなるような環境の構成をすることは極めて重要である¹³⁾と述べている。子どもが興味や関心を持って繰り返し遊びや活動などを、身体諸機能の発達の視点から捉え直し、子どもが十分に全身を動かし、その心地よさを味

わえるようにすることが大切である。様々な動きを引き出せるような遊具や用具の配置、子どもの動線を予想した場の構成にも気を配る必要がある。保育所保育指針で示されている環境を通して行う保育という言葉からも、常に保育施設内の物的環境、人的環境などの活用とさらなる充実を図っていく必要がある。

上記のように運動遊びを援助・指導する上での課題について考察を行ってきたが、今回のアンケート結果では、88.2%の保育士が毎日、ほぼ毎日体を動かして幼児と遊んでいることが示されていた。ここからも、保育者が幼児と一緒に体を動

かしながら保育をする意識は非常に高いと見られる。一方的に教えるのではなく、遊びのかたちでの運動経験が運動の発達にとって最も有効であると考えられているのではないか。運動を好きになる子どもを育てるための保育者の資質について、居崎らはやる気を起こす声かけの仕方、保育者自身がモデルになる、能力に応じた運動体験をさせること、運動の持つ楽しさを伝える工夫をすること¹⁴⁾を挙げている。運動遊びを取り巻く問題に対して、保育施設における運動遊びの機会や保育者の運動遊びに関する援助・指導が子どもの成長に与える影響は大きい。保育施設全体の系統的な運動遊びのカリキュラムの検討と保育者一人ひとりの実践力を高めていくことが求められる。

Ⅶ おわりに

本研究では、保育士は幼児の運動遊びの経験(生活経験)不足や体の操作が未熟であることを課題としてとらえている傾向があり、また、運動遊びを援助・指導する上では、一人一人の個人差や発達段階に応じた援助・指導方法や年齢・発達の特性に応じた運動遊びの内容について課題と感じていることが明らかになった。

幼児期の遊びは重要であり、遊びと運動は切り離せない関係にあることや発達段階に応じた適切な運動遊びの必要性については、多くの研究からも強調され、体育的、運動学的視点からのアプローチも数多くされてきた。幼児期に運動遊びを通して獲得する基本的動作は、生涯にわたる運動への関与や習慣化を考えると、その基盤になると考えられる。幼児期における運動能力の開発の観点は、遠く、早く、長くよりも、いかに多くの運動パターンを習得し、習熟できたか¹⁵⁾を重視している。また、運動遊びによって子どもの行動能力を高めることになり、その後の児童期や青年期以降へとつながり一生を支えるものとなる。生涯を健康に過ごすために、個性を重視した教育や運動の習慣化が強調される今日では、子どもの発育・発達に即した適時性を生かした運動指導を行うためには、様々な調査や分析的研究と同時にそれらを

統合、集約し実践的な保育活動に役立つ援助や指導法の研究を深めることが重要である。

国内で初の幼児期における身体運動ガイドラインである「幼児期運動指針」では、幼児に関わる人々が、幼児期の運動をどのようにとらえ、どのように実施するとよいのかについて、おおむね共有していくことが重要である¹⁶⁾と策定した意図が述べられている。しかし、幼児期の運動をどうすべきかについて示されたものの、あくまでも指針であり、小学校以上の学校教育における学習指導要領のような強制力を持っていないため、まだまだ認知されていない部分も多いのが現状である。保育所保育指針や幼稚園教育要領において遊びの意義について理解するだけではなく、幼児期運動指針から、遊びを中心とした運動指導の意義を園全体で共有できる環境が必要だと言える。子どもたちの健全な成長を支えたいという思いを全体で共有できるシステムの構築が求められる。

これまで述べてきたように、子どもの体力や運動能力の低下が問題とされる中、保育施設で行う運動遊びの機会や保育者の運動遊びに関する援助・指導が子どもに与える影響は大きいと考えられる。清らは、子どもの発達に応じた指導や保育者が個別の運動遊びの指導法を理解して固有の動きに着目して指導する必要がある¹⁷⁾と述べている。このことから、保育者が果たす役割はますます大きくなると考えられ、幼児期の運動遊びを充実させ、系統的に運動遊びを学べるシステムの構築やそこでの保育者の実践力を高めていく方策については今後の課題としたい。

付記

本研究のアンケートに協力してくださった先生方に深く感謝いたします。なお、本研究の一部は、2024年度宮城学院女子大学の研究助成を受けて行われたものである。

文献

- 1) 文部科学省 (2004) 「平成 25 年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書」

- 2) 日本学術会議健康・生活科学委員会健康スポーツ科学分科会 (2008)「子どもを元気にするための運動・スポーツ体制の整備」, p.3.
- 3) 竹田隆一・小川宏・菅家礼子 (2022)「幼児教育における運動遊びに関する研究—『1000 Spiel- und bungsformen zum Aufwrmn (準備運動のための遊びと運動 1000)』に着目して」, 福島大学人間発達文化学類論集, 35, pp.81-91.
- 4) 大木みどり (2018)「幼児期の運動遊びの実態と課題—保育者が指導・援助する上での課題」, 羽陽学園短期大学紀要, 10(4), pp.395-406.
- 5) 清水将之・相樂真樹子 (2022)「実践例から学びを深める 保育内容・領域 健康 指導法」, わかば社, p.80.
- 6) 前掲書 5)
- 7) 杉江栄子・鈴木文代・村岡眞澄 (2012)「保育実践力の育成・向上に関する研究—5 歳児の鉄棒の場面での指導・援助」, 愛知教育大学幼児教育研究, 16, pp.25-32.
- 8) 前掲書 4)
- 9) 守 渉 (2023)「身体の動きが不器用な幼児に関する研究」, 宮城学院女子大学発達科学研究, 23, pp.22-30.
- 10) 川島民子・奥田援史 (2019)「幼児の身体的不器用さの特徴に関する研究」, 滋賀大学教育学部研究紀要教育科学, 69, pp.45-52.
- 11) 三井登 (2013)「幼児期の運動遊びにおける指導法の課題」, 帯広大谷短期大学紀要, 50, pp.127-136.
- 12) 前掲書 4)
- 13) 杉原隆・河邊貴子 (2014)「幼児期における運動発達と運動遊びの指導」, ミネルヴァ書房, pp.1-226.
- 14) 居崎時江・稲嶋修一郎・藤井勝紀・穂丸武巨 (2008)「幼児の体力、運動指導に関する保育者の意識調査」, 発育発達研究, Supplement, p.90.
- 15) 砥堀雅信・土田了輔・永木耕介 (1996)「幼児期における運動遊びと体育指導に関する一考察」, 上越教育大学研究紀要, 15(2), pp.223-231.
- 16) 文部科学省 (2012)「幼児期運動指針ガイドブック」
- 17) 清葉子・想厨子伸子・村岡眞澄・脇田町子 (2018)「幼児クラスにおける保育者の運動場面での援助・指導の傾向—保育者へのアンケート調査の分析から」, 梶山女学園大学教育学部紀要, 11, pp.59-68.